
魔法少女アストロ なのは

夢を追う男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女アストロなのは

【Nコード】

N2320BA

【作者名】

夢を追う男

【あらすじ】

仮面ライダーフォーゼがミッドチルダにキター！

小説にはまだ馴れていないのでそれでも読んでみたい方はよろしく
お願いします

00話 連・載・予・告(前書き)

新番組(連載)予告!

00話 連・載・予・告

「俺の名前はナカジマ・ゲンタロウ！この起動六課の全員と友達になる男だ！よろしくな！」

突然現れた起動六課の新入り局員

「ゲンちゃん久しぶりいつ！」
かつての仲間ダチとの再開

「やっぱり出やがったか…ゾディアーツ…」
姿を表す怪物

そして…

「3！」

あの…

「2！」

仮面ライダーが…

「1！」

ミッドチルダに…

「変身…！」

やって来た！

「宇宙…キターーーーーー！！！」

「俺は名はフォーゼ！タイムン張らせて貰うぜ！」

「変形した！？」

「アストロスイッチは僕が管理する、それでいいかな？」

第1話「六・課・入・局」

00話 連・載・予・告（後書き）

さて上手く書けるかなあ…

主・役・紹・介（前書き）

オリ主紹介です

ちよこちよこ更新します

主・役・紹・介

名前：ゲンタロウ・ナカジマ

年齢：18歳

出身：第97管理外世界

所属：時空管理局 起動六課 スターズ分隊

元は第97管理外世界【地球】出身で元の名前は【中島 弦太郎】、ミッドチルダに引越した際に戸籍上の名前は【ゲンタロウ・ナカジマ】になったが本人は前の名前が気に入っていたため【ナカジマ・ゲンタロウ】と勝手に名乗っている。

なのはより1つ年下、苛められていたなのはの同級生をゲンタロウが助けてからなのはとも仲良くなる。

なのはを通じてアリサ、すずか、フェイト、はやて、と友達になっている。

ユーノやアルフはそれぞれ動物形態しか見たことがない為、友達にはなっていない

魔法の存在を知ったのはミッドチルダに引越した後、父親から突然魔法の存在を告げられる。

その後、科学者だった父親が残した【フォーゼドライバー】で【仮面ライダーフォーゼ】に変身する。

01話 六・課・入・局（前書き）

タイトルの四字熟語を考えるのが密かな楽しみです

01話 六・課・入・局

今日は時空管理局・起動六課にて新入り局員の自己紹介が始まるう
としてた。

しかし、新たな仲間が加わると言うのにそこに居る一部の人間はす
ぐにでも逃げ出したい気分になっていた。

局員の制服を着ず、黒い学ラン、そして一際眼を惹くのが髪型、な
んとリーゼント。

ミッドチルダにもそう言った格好をしたものは不良と言うイメージ
が定着していた。

格好だけならばまだコスプレ野郎で済んだかもしれない。

だが物凄い眼力で辺りを見回しているのだから堪ったものじゃない。
一呼吸置き、男の口が開かれた。

「俺の名前はナカジマ・ゲンタロウ！この起動六課の全員と友達に
なる男だ！よろしくな！」

急に彼の顔が満点の笑顔に変わりその場に居た局員は呆気に取られ
しばらく立ち尽くしていた。

「よおっ！久しぶりだなあっ！」

ゲンタロウはそう言って一人の局員に歩み寄る。

「ゲンちゃん久しぶりいっ！」

彼女、高町なのははゲンタロウとハイタッチし、互いに握手、さら
に腕相撲の様な形で手を組み直した後、正面、上、下と拳を打ち付
け合う。

「あれから友達増えた？」

「応よ！友達100人所か今じゃ友達1000人だぜ！」

そう言っ自分の胸を拳で軽く叩いた後、人差し指を伸ばしてなの
はに向かつて腕を伸ばす。

「なのはさん、知り合いだったんですか？」

するとなのはの背後から2人の少女が現れる。

「よう、話には聞いてるぜ…あんたらがなのはの教え子のスバル・ナカジマとティアナ・ランスターだな？友達の教え子はまた友達だ！お前達も俺のダチだ！」

「は、はい…」

「テンション高いんですね…？」

2人、スバル・ナカジマとティアナ・ランスターは若干引き気味に受け答える。

「ゲンちゃんとは小学生の時に友達になって、それっきりだったんだけどね、まさか管理局に来るなんてなあ…」

空を仰ぎ昔の事を思い出すなのは。

「そう言えばナカジマさんって…「ゲンタロウでいいぜ。」えと…じゃあゲンタロウさんで…ゲンタロウさんって私と名字が同じなんですね。」

スバルがそう言うのと他の3人も腕を組み、言われてみれば…と呟く。

「ナカジマ三佐…あ、スバルのお父さんね？の父親の故郷が地球で、ゲンちゃんは地球出身だよね？」

「ああ、なのはとダチになってからすぐにミッドに引越したからな。」

戸籍上は【ゲンタロウ・ナカジマ】なのだが語呂が悪い、父親が地球出身と言う事で本人は【ナカジマ・ゲンタロウ】と勝手に名乗っている。

実際、局員証明書は【ゲンタロウ・ナカジマ】になっていた。

「ま、色々あるかもしれないけどこれからも頼むぜ。」

ゲンタロウなのは達は達に向かって握り拳を突き出した。

「はやくもフェイトもでかくなつたなあ…」

そう言って再開した友人、はやくとフェイトの隣に立って背を比べ

る。

「ゲントロウこそ、あの時は私より背低かったのに…」

フェイトは何故か少し寂しそうに呟き、

「大きくなったのは身長だけやあらへんけどなー」

はやてはゲントロウの腕にしがみつく。

「お、おいちよつと待てはやて！？離せ！」

ゲントロウの腕に柔らかい何かが当たりはやてを振り払う。

「相変わらず免疫は無しかいな…？私のはまだ小さい方やで？」

ニヤニヤ笑いながらゲントロウを見つめるはやて。

「う、うるせえ！」

しがみつかれたせいで若干乱れた服装を整える。

「と…とにかく何か事件が起きたらよろしく頼むぜ。」

ゲントロウは軽く手を振って2人から離れていった。

(こいつ…)

(この男…)

(…できる！)

「おい、シグナムー？」

ゲントロウは六課の中を見て回っている最中にヴォルケンリッターの面々と出会い、現在その将、シグナムに眼をつけられ、ゲントロウもまたシグナムに眼をつける。

完全に自分の世界に入ってしまったシグナムにヴィータが呼び掛けるが返事はない。

「お前…いい身体してるじゃねえか…よし決めた！お前俺のダチになれ！」

そう言って手を勢いよく出し、握手を求める。

「ふっ…良いだろう…だが一つ条件がある…」

「何だ…？言ってみろ？」

その横で他の面子はやれやれと言った感じで方を竦めた。

「シグナム副隊長と決闘…ですか…?」

「応! あいつ中々強いらしいな燃えてきたぜ…!」

訓練場の前でゲントロウはエリオとキャロの二人にも会う。

「大丈夫かなあ…」

意気揚々と訓練場に向かっていくゲントロウを心配そうに見つめる
ライトニングの二人。

その後ろに、ゲントロウを睨み続ける一人の局員が居た事には誰も
気づかなかった。

「さあてと…約束通り…タイムン張らせて貰うぜ…!」

「烈火の将、シグナム…参る…!?!」

ゲントロウとシグナムの二人が訓練場で向き合ったその時、突然シ
グナムの足元から火花が吹き上がる。

「な!? おい大丈夫が!?!」

「問題ない、だが今のは…!」

シグナムが辺りを見回すと謎の怪物がこちらに向かって迫っていた。
「なんだあれ…!」

シグナムが決闘をすると聞いて集まっていた野次馬達が怪物を指差
す。

「体にオリオン座…やっぱり出やがったか…ゾディアーツ…」

「お前…あれを知っているのか?」

ゲントロウはゾディアーツを見据えながら何かを取りだし腰に装着
する。

「悪い、「ロケット!」決闘は「ランチャー!」お預けみたいだな
…「ドリル!」皆を避難させてくれ。」「リーダー!」

そしてバツクルに4つのスイッチを装填する。

「それがお前のデバイスか…?」

「少し違うが…そういう事にしとくか…あいつは俺が片付けるから後は頼むぜ…！」

バツクルについている赤いスイッチを全てオンにすると…

『3!…2!…1!』

カウントダウンが始まり、

「変身！」

そう叫んでベルトの右側に付いたレバーを押すと同時にゲンタロウを中心に風が吹く。

さらに軽快なBGMが流れ、カプセルの様なエフェクトと共にゲンタロウは姿を変えた。

「な…？」

シグナムは姿を変えたゲンタロウを思わず見つめてしまう。

そして…ゲンタロウは肘を閉じ、体を縮め…

「宇宙…キター…！…！」

思いっきり腕を広げ叫んだ。

「キサマ！ナニモノダ！」

ゾディアーツがゲンタロウに向かって指を差す。

ゲンタロウはゆっくり右手の拳をゾディアーツに向かって突き出しこう言った。

「俺の名前はフォーゼ！タイムン張らせて貰うぜ！」

その直後、フォーゼはゾディアーツに飛び掛かりその勢いで跳び蹴りを見舞う。

「グアア！」

吹っ飛ばされるゾディアーツ。

「さてと…『ん？』レクター オン』追撃しようとしたフ

オーゼ突然レクターが鳴り、スイッチを入れ、左腕にレクターを装着する。

「どうやらうまく繋がったみたいだね。」

「なのは！？何でお前…！」

レクターの画面に映ったのはなのはだった。

「ふえ？何で私の名前…？」

「なのは不思議そうに首をかしげ…」

「あ、俺だ…ゲンタロウだ」

「ゲンちゃん？」

「なのはフォーゼがゲンタロウだと言うことに驚く。」

「無視スルナア！」

ゾディアーツが襲いかかってきたがフォーゼは足を突き出してゾディアーツを止め、空いた右手でゾディアーツを殴る。

「なのは、話があるなら後にしてくれ…」

「ちょ、ちよつと！」レーダーをゾディアーツに向けると同時にランチャースイッチを入れる。『ランチャー オン』

「ロックオン！食らえ！」

レーダーでゾディアーツをロックオンし、ランチャーを的確に命中させる。

「よつと…」『チェインソー！』

ランチャーとレーダーをオフにし、ランチャーを抜いてチェインソースイッチを装填する。

『チェインソー オン』

「やっぱりカッコいいぜ！」

フォーゼの右足からチェインソーが現れる。

「ウアアアッ！」

ゾディアーツが体から水色のエネルギー弾を撃ち出すがフォーゼはそれを回避、接近してチェインソーの右回し蹴りでゾディアーツをよろけさせる。

「よし、リミットブレイクだ…！」『ロケット ドリル オン』

ロケットとドリルのスイッチを同時に入れ、ロケットで真上に飛び上がる。

「これで決めるぜ！」『ロケット ドリル リミットブレイク！』

「ロケットドリルキイイイック！」

ロケットで加速し、ドリルが装着された右足でゾディアーツに向か

ってキックを放った。

ゾディアーツに命中すると同時に爆発が起き、フォーゼはドリルが地面に突き刺さって身体が激しく回転するが、途中で回転を止めキメポーズを取った。

「どんなもんだ！さて…スイッチスイッチ…あれ？スイッチが無え？」

「どうした？」

野次馬の避難を終えて戻ってきたシグナムが何かを探しているフォーゼに声を掛ける。

「ゲンちゃん！」

するとなのはがフォーゼの元にやってくる。

「ん？見ねえ顔だな？」

なのはと共に別の男性局員もなのはと一緒にやって来る。

「あのゾディアーツは分身なんだ、本体は別に居る。」

「マジかよ…って何でそんなこと知ってたんだ？」

ゲンタロウは変身を解除し、髪を整えながら訊ねる。

「詳しい話は戻ってするから着いてきて。」

ゲンタロウはなのはと一緒に彼に着いていった。

01話 六・課・入・局（後書き）

次回の魔法少女アストロ なのはは！

「実は管理局でもゾディアーツの事はある程度解ってるんだ。」

「お前なんかには彼女は渡さない！」

「しつこい男は嫌われるぜ？」

「仮面ライダーフォーゼ！タイムマン張らせて貰うぜ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2320ba/>

魔法少女アストロ なのは

2012年1月6日11時45分発行